

迷ひ子

朝露生譯

わが子をはむるはいと愚かなることでありま
すが、瑠璃子はまことに可愛ゆき幼顔にて、細面
なものはぢしさうな、見るからにいぢらしく、キ
ツスせず居られぬ顔だち、それに黒き瞳のもの
云ひたげにキラキラして、きやしやな身ぶりの、
いつも舞踏でもはじめるやうな足どり、表は白く
裏は緑なる日よけ帽子と、お玉さんと云ふ人形と
は、いつも附屬物でございました。そのお玉さん
を、どう云ふつもりか、いつも倒まにしてもッて
あるいて、朝の六時から晩の六時まで、機嫌よく
遊んでゐる子でございました。
アレが迷ひ子になりましたのは、たしか四ツの時
でしたと存じます。御まちなさいませ、その時の
こと御話いたしませう。

ある日のこと、私は急ぎの縫ひものがありまし
て、一心に針を運ばしてゐました、フト見るとる
り子はいつの間にか傍に來てゐます。日よけ帽子
と人形は例によりて身を離さず、しとやかに私の
脇に座りてものほしさうな、その顔を私の袖に
接觸しました。私は丁度忙はしき折とて、小指にて
軽くその頬をつつついたまゝ、何とも云はずに針
を動かしてゐます。暗くならぬうちに、ボタン
の穴をみんな縫ひ留めて仕舞はねばならぬのでし
た。るり子は私の腕にすがりついて、かあちやんあ
まり、ひどいことよと申しました。つぶやくやう
な涙聲で。

ほんにかあちやんはアマリひどいことチー。ポタ
ンの穴なんか何時でもよいのに、何より大事の御
前を余所にしてネーと、そのまゝ抱きあげて、御
詫の分までもキツスしたのです。
その夕、食事のあと、一家團欒してお茶を頂いて
ゐましたが、例のお玉さんは、例の通り倒まなつ

て、るり子の膝に載つてゐました。隣村まで一驅車させたいが、るり子を連れてゆつてもよいかネとは、おとう様の御言葉でした。

いけません、るり子は三十分後にはおねまきに着かへて、ネンネするので、いくら馬車でも今晩は寒くもあるしと、私は御断り申上たのです。るり子は、例のもの云ひたげな睡を私の方にむけました、何も申しませんでした。残つた御菓子と頂き、御茶も飲み了へて、お玉さんと日よけ帽子を携へ、お玉さんは、無論倒まにして、一寸と戸外へ出たやうでした。

それツきりるり子は見えなくなつたのです。三十分後に私は乳母に命けました。るり子を早くつれて来て、御ねまき着かへさせな。乳母は戸外にゆきました。そしてるり子さんるり子さんと呼んでゐる聲がします。けれどるり子のいつもの可愛らしき聲はきこえぬやうです。何だか氣になるもんだから、乳母の聲をたどりて、私もゐながら

戸外をさまよふてゐました。花園の方から、倉庫の方まで、倉庫の方から馬屋の方まで、尋ねてゐる様子、ハテナと云ふや否や私も戸外に出でました。

乳母や、どうしたの、るり子はゐないのかネ。奥様、どこにもゐらしやらないやうでございます。私は臺所に引きかへして、おさんに尋ねました。さんや、御前、今のさつき、るり子を見ないかへイ、エ、奥様、チツトも存じません。私はこの時もはや動悸がしてなりませんでした。お隣と申したところが半里もある一軒家、まだ程近き河と申しても、るり子は今まで一人でゆつたことはないのですもの、どうしたのでせう。乳母も氣が氣でないやうな顔つき。乳母、御前は急いで御隣の峯村さんに行つて御出、若しやるり子はわがツてゐるかもしれないから、わたしは太助をつれて河の方へゆつて見るよ。太助や、牛乳を絞ることはわたしにして、わたしについて来ておくれ。夢路を急

ぐやうな心地して、河へくだりゆく道すがら、荆棘のかがげも倒れ木のうしろも、一々立ちとまりてはのぞきてみ、さては一と足ごとに、るり子やるり子やと呼んでゆきました。けれどどうしても見あたりませんでした。河の岸にも、小さな足跡はなく、人形も帽子も落ちて居るぢやなし、これぞと云ふ手が、りは殆んどありませぬ。私は唯一と眼河の水をのぞいて見ました。けれどそれはホンの刹那でした。どうしてあの子はそんなことになつてたまるもんですか。とかくするうちに、日はすてに西の山にかくれ、たそがれの景色は、いとどうら淋しくなりました。怪しの鳥はかなたの森にさけび、足もとに鳴く蟋蟀さへ薄気味わるくさこゆるのですもの、その吹く夕風のあらなくに、私は身ぶるひいたしました。それにしてもるり子はどうしたのでせう。ア、ふとう様ばかりも御早く御かへりだといいに。私の歎聲にすぐ御答してくだすつたやうに、眼の前に馬車が現はれ、良人

は御歸りでした。はしたなくも御手にすがりて、ありし事どもを申上りましたが、心配することはない。どこへゆくものか。と輕々しく仰せられて、わざとらしく御笑なさるのです。日は全く暮れて仕舞ひました。西の空に糸一束ほどの余光あるばかり。サアすぐうちに御歸りよ。是處に立つてゐたつてどうなるものか。御前は太郎と家にゐてまつてゐな。太郎は乳ほしくて泣いてゐるかもしれぬ。良人にかく云はれましたから、私はわりなくも家に歸ることとして、一と眼良人の顔をのぞきましたら、暗にもしるき心配の色、まさしく蒼くなつてゐらつしやるのです。太郎を搖籃から下ろして、襦袢をとりかへなどしてゐるうちに、私の胸は石のやうに重くなりゆきます。マアこん墨ながしたやうな暗の夜に、アノ子はどこにどうして居るとやら。ア、黄金にも玉にもかへがたき可愛い子を、むざむざ母の手から奪はるゝことか。

乳母は太郎の乳をもツてきて、お隣にはゐなかつたことや、良人では再び河へゆつたことや、うちしめりて話しました。それでは彌々河へ……と私は両手を顔にあて、泣き伏しました。

咄嗟に戸が開かれて、ア、夢ならさむるな、るり子はまさしく私の前に立つてゐます。髪は亂れ着物はよれて、いかにも睡むさうな眼つき口つきお玉を倒まに腕にかゝへ、片手に帽子を提げてゐました。るり子です。たしかに。

私はだゞ意味もなく叫びました。泣いたのやら、笑ふたのやら。マアるり子や、御前はどこへゆつてゐたの、御前は迷ひ子になつて、河へ落ちたと思ふたよ、ア、うれしいよく御前はかへつてきておくれたネー。あたゐ知らなくつてよ。かあちやん。あたゐ眠つてゐたのでせう。るり子は眼をこすりながらこう云ふのです。何はさて、しつかりと抱きかへて、アノ子の頭を私の胸につけ、耳に口よせて、尋ねました。るり子や、御前どこに

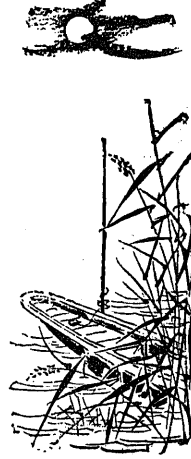
ゐたの、髪はこんなに亂れてサ、着物もこんなに皺くちやになつてゐるネー。でもマア歸つてきておくれただから、かあちやんはうれしいよ。顔のいづこともなく幾度かキツスしながら私はかく申したのです。御前、御茶をいたゝいてから、どこへゆつたの。アノネかあちやん、とう様の大きな荷車ネ、あの中にはいつてゐたの。これですつかり解決されたのです。

藪を敷いてゐた荷車の箱の中にはいつて、そのまゝ睡つてゐたのでした。裏庭の隅にあつた車まで、私共は幾度もそのそばを通りましたが、藪の中に大事の品物が隠れてゐるとは、誰れも気がつきませんでした。

なぜ御前はあんな高いところへ攀ち登つたの。今度からあんなことすると怪俄しますよ。御よしなさい。いゝ子だから、るり子はお愛嬌に私の頬を指にてなでながら申しました。あたゐとお玉さんと一驅車したのよ。おとう様の馬車に乗りた

かつたんです、けれど、かわ様はやつてくださらないし、だからわたいとお玉さんと、馬車ごっこをして遊んだのよ。呆れた子だネーと一家笑の種となりて事すみましたが、その折の心配、御話にならぬほどでした。御察し下さい。

(ジュリヤ、ドール夫人の小話集より)



割烹

石井泰次郎

茶碗

碁石 木のかれひ
わらび 木の芽

六寸はかりの鯉を、うろこをふき、頭を去り、腸を取り去りて四節にふるし、皮付のまゝ、五六分の幅づゝにたてに切りそれを横にして、又五六分

づゝの丈に切る、即ち五六分の角に切りたるなり切りたるを、背の、黒皮の付き方と、腸の方の白皮の方のとを、別々に平皿にならべ(皮の方を下に身の方を上にして、鹽をふりかけて暫く置き)(二三分間)次に、蒸籠の中に竹の皮を敷き、其中へ鯉を水に洗ひて鹽を落し、並べ入れ、湯鍋の上にかけて蒸して、用ふるなり、わらび(小二把、二寸位の丈のもの三十本ばかり)は、根のところを取り去り、水にてよく洗ひ、湯鍋に入れて十分間湯煮し、炭酸ソーダを入れたる水の中に取り入れ、其まゝ暫く置き、あくを出して後用ふるなり、茶碗の汁のこしらへ方は、先づかつを煎汁一升を鍋に入れ、火にかけて煮立ちたる所へ、酒二勺、次に鹽五勺、醬油一勺(但し品により多少の加減あるべし)を加へ味を試みて火よりふるし茶碗に、かれひの黒皮、白皮を交ぜて入れ、わらび二三本を入れ置きて、右の汁をつぎ入れ、木の芽をひとふさおとし入れ蓋をして進むなり、